

平成 31 年 2 月 18 日 市長定例記者会見 会見録

【司会】

はい。それでは、ただ今から市長定例記者会見を開催いたします。
先ほどご案内したとおり、本日もライブ配信でございます。
本日の話題は2件になりますが、市長よろしくお願いたします。

【市長】

はい、わかりました。よろしくお願いたします。
週末から春の訪れを感じられるような、とても暖かな、そして素晴らしい青空が広がる天気が続いて
おります。改めて、静岡って恵まれているところだなというふうに感じます。
これが終われば、すぐにもう新茶のシーズンであります。
という前ふりをした後で、今日、何を最初に2分だけ申し上げようかという、意外と取材が少なかつ
たので残念なんです、先週の土曜日に、すごくユニークな、経済局と官民連携の取り組みなん
ですけれども、「第9回の T1 グランプリ in 静岡市」というのを開催したんですよ。
記者、知ってた？

取材に来て欲しかったな・・・オフでございましたか。
これは、小学生3年生から6年生達が、「お茶の知識と作法を競うコンテスト」なんです。第9回な
んですけれども、今年、今まで最大の百数名の参加者を得て盛大に土曜日にやったんですね。
1回戦からずっとあってね、チャレンジが。最後、僕、決勝戦の前に飛び込んで会場に決勝戦の優
勝者が市長賞だということで、その表彰状を渡しに行ったんですけれども、素晴らしいんです、小学
生ですよ。優勝者は5年生の女の子でしたけれども。
どうやってうまくお茶を入れたら美味しくなるかとか、あるいは、どうやったら所作として、おもてなし
の心を伝えることができるのかと。いわゆる茶道顔負けのそんなところが基準になって、グランプリを
決めるというやつなんですよ。
これを、小学生の頃から一つの機会として「勉強ができる子」、「スポーツができる子」と、いろんな
個性があるんだろうけれども、こういう静岡の特産物のお茶については、私は負けないぞという小学
生が育ってきているっていうのは、すごく“まちづくりは人づくり”という点で、優れた取組みだなと。
経済局が、茶商の皆さん、日本茶インストラクターの皆さん、実行委員会の皆さんと一緒にプロデ
ューズしたコンテストなんですけれども、ぜひまた皆様に知っていただきたいなというふうにお願しま
す。ちなみに優勝者は、静岡市立安倍口小学5年の海野志歩さんでした。
なので、あるじゃないですか、「この人」とか「おはよう」とか、あれにちょっと登場をしてもらったら嬉
しいなということを私からお願をしておきます。

さて、それでは今日の本題に移ります。今日の話題は2件。
まず一つ目は、「平成 31 年度当初予算案の概要」についてです。

これは、すでに先週 13 日水曜日に財政局から皆さんへレク済みだと聞いておりますので、私は端折って端折って読み文を読み上げます。

ただし、この A3縦紙のこの資料。先週も配布したのかもしれないけども、秀逸ですのでね。これを見れば、すぐに記事に書けると。とても親切な記者の皆様により優しい資料でありますので、ぜひ活用をしていただきたいなと思いますけれども、これをご覧になりながら聞いてください。

予算規模は、一般会計が 3,180 億円。対前年度 58 億円 1.9%の増で、過去最大だった前年度をさらに上回る予算規模となりました。そのうち投資的経費は、前年度に引き続き 400 億円を超える額を確保し、積極的な予算編成となっています。

また、特別会計、企業会計を合わせた、全会計は約 6,225 億円。対前年度約 56 億円、0.9%の減であります。

さて、この①の資料にも書いてあるように、上から2つ目ですね、予算編成のポイントは3つ。

1つ目は、本市の最重要課題である、5大構想を実現するための施策に予算を重点配分したこと。

2つ目は、人口活力維持拡大し地域経済活性化につなげる取り組みを予算に反映をしたこと。

そして3つ目は、第3次行財政改革推進大綱やアセットマネジメント基本方針に基づく取り組みを予算に反映したことでございます。

とりわけ私の目玉政策というか、3次総の最重点政策群の5大構想について言及します。

ただね、これは今日言っちゃうとアレなんで、21 日の市議会本会議午後1時から、私、今年度の施政方針演説に臨みます。その時にちゃんと言っておりますので、それをぜひ皆さん、発信をしていただきたいなというふうにお願いをいたしますので、ここではその触りぐらいにしておきます。

ただ、5大構想の中にも、色々、ページの制約があるので全部書ききれないもんですから、当日 21 日は「歴史文化」と「海洋文化」と「健康長寿」には言及するんですけど、「教育文化」と「まちは劇場」については、さらっと通るだけだもんですから、その2つだけここで補足しておきます。

「教育文化の拠点づくり」、ここでは東静岡地区と草薙駅地区について教育文化の香りが漂い、多くの若者が集まり交流が生まれる拠点としてまちづくりを進めるため、ランドデザインの策定に着手します。

一方、「シチズンカレッジ こ・こ・に」は、将来地域を担う高校生を対象とした講座を新しく開講するなど、シチズンシップに富んだ人材の養成に努めてまいります。

さらに、これが2つ目の話題につながるわけでありまして、「まちは劇場の推進」であります。

静岡市で開催される複数のフェスティバルをパッケージ化して、シンボルとなるようなブランド戦略を展開し、フェスティバルによる交流人口の拡大と地域経済の活性化の両立を目指すとともに情報発信力を強化し、国際化の推進を図ってまいります。

つまり、「まちは劇場、世界化」、次のフェーズに入るといふことでもあります。

一方、日本平のナイトツーリズムや駿府城公園内のナイトエンターテイメント、「駿府灯り回廊」、さらには、清水都心のウォーターフロント活性化推進事業も連携して、いわゆるナイトライフエコノミーと言うのかな、夜のにぎわいの創出も図っていきます。

以上5大構想ですが、それにつながる、ここで言うと一番下段の3次総重点プロジェクトというところ

が2つあるわけですが、二本柱として、まず左側の青い部分は産業経済の振興の項目です。

例えば、交流人口の拡大を目指し、日本平動物園開園 50 周年記念事業を展開します。

また、中小企業の振興や農業の活性化を図るため、特に農業分野においては局長級の「農林水産統括監」を新しく配置をし、市の組織体制を強化しつつインフラ整備が進む清水港周辺の農業などの利活用による地域経済の活性化の施策に取り組んでいきます。

右側の赤い所、安心・安全の確保の方では、子ども子育て支援の充実を図るため、不登校児童・生徒の専門の訪問教育相談員を設置するとともに、災害対応力の強化に向け情報伝達の多重化を図るため、緊急情報防災ラジオ、前に配付をしてすごく好評だったものですからね、またこれ欲しいよって声もずいぶん市役所に寄せられていますので、もう一度、緊急情報防災ラジオの頒布を、行います。以上が平成 31 年度の当初予算案の概要です。5大構想を中心に、3次総を強力に推進して、静岡経済の活性化を図り、世界に輝く静岡の実現を目指して取り組んでまいります、ということです。

さて、それでは、今日のメインの話題。「まちは劇場、世界に向けたプロモーションを開始」という項目に移ります。

5大構想として、まちは劇場の推進をしたんですが、これは秋の風物詩である大道芸ワールドカップで市内が賑わう、あの雰囲気を中心化したい、年がら年中化したいというところ。それが、交流人口の拡大につながったり、地域経済の活性化につながっていくと。文化クリエイティブ産業を戦略産業とし、位置づけている底上げにつながるということで、5大構想の中に位置づけているんですけどもね。どちらかというね、大道芸ワールドカップは、近隣といいますか市民を対象にやってきたんですね。世界レベルではね、極東の日本の地方都市・静岡市が大道芸ワールドカップなんていうにはちょっと大げさなネーミングなのかもしれません。だから、一つのローカルイベントとしてやってきたということです。

ただ、次のステップは、本気でこのまちは劇場の世界化を図っていくぞと。つまり、市内の県内の皆様に集まっていたかというわけではなくて、世界中から「まちは劇場の静岡市」を訪れたい、来てもらいたい、というフェーズにステップアップしてくぞということの象徴として、この度シンボルマークも作り変えました。従来のまちは劇場のシンボルマークというのは皆さんご存知の方も多いかと思いますが、これだったんですね。これも公募で数多くの作品の中から一等賞に選ばれてこれだということなんです。これは、まちは劇場の笑顔ですよね。唇を図案化して、ワクワクドキドキの仕組みをシンボライズした笑顔を象徴して、「まちは劇場SHIZUOKACITY」と。それが最優秀の作品だったんですけども、一方、これを世界レベルで見ると、これちょっとまずいよねと。

この図案で、まちは劇場ってイメージできないよねっていう指摘を受けたんですね。外国の方々が例えば、これ、なんか中年女性の太い唇、厚い唇にしか見えないとかね。それは、非常に微妙なわけですよね、シンボルマークとして。昔、ダッコちゃんとかいうね、人形がこれも記者の時代に流行ったんですけど、今はとてもダッコちゃんはプロデュースできないわけですよね。共生都市ということ言うと。そうすると、我々もこれを進化させなければいけない。それでは、世界的には通用しない、といって作り直したのがこっちのシンボルマークなわけでありまして。「ON STAGE SHIZUOKA」と。

これは ON STAGE、つまり、静岡市はどこもステージなんだよ、舞台なんだよ。そこで様々な音楽や演劇や大道芸や様々なスポーツなんかも含めてね、パフォーマンスアーツで、やはりそこで人々は感動するし、興奮するし、またそれによって人々の心が一つになるかもしれない。そんなオンステージの環境をつくと。東京ガールズコレクションというのは、まさにそうですね。キラキラとしたモデル達にステージという機会を与えて、それを見る人は「私もあんなってみたいな」っていうふうな気持ちにさせるわけですね、感動を与えるわけですね。同時にもっと深い意味は、こういうことに触発をされて静岡市っていうのは、それぞれ市民一人ひとりがオンステージなんだと、活躍する場所があるんだ。例えば女性が活躍をする「女子きらっ☆プロジェクト」というのを展開しているわけなんですけれども、やはり人口減の時代、女性の皆さんに経済社会の最前線に立って働いてもらわなければいけない、仕事をしてもらえなければいけない、そういう中でオンステージ静岡なんだと。

女性がキラキラ輝くような都市環境を実現するということも静岡市のSDGsとタッグを組んだ一つの都市目標なんだと。そんなすごく大きな意味を踏まえたこんなシンボルマークであります。

ただ、まずは、「まちは劇場」の新しいシンボルマークとしてこれを採用することにいたしました。

今、国では東京オリンピック・パラリンピックの開催が間近に迫り、世界中が日本に注目する2020年にインバウンド4,000万人も視野に入ってきました。静岡市でもこのチャンスを逃すことなく、世界から注目され、世界中の人が静岡市を訪れてみたいと、そんな静岡市を目指し、海外の都市とのフェスティバル間交流やソーシャルメディアを通じたまちは劇場の世界に向けた発信など、世界に向けたプロモーションを強化するフェーズに入ったというようなことで、今日の発表につながったわけがあります。

さらに、こうした取り組みをSDGsの目標年次である2030年まで着々と続けていき、静岡市をいつの日か、例えば私たちのロールモデルであるイギリスのエジンバラ市、あるいはフランスのアビニオン市、両方ともヨーロッパでは有名な演劇祭・フェスティバルが行われております。そんな日本の代表都市に発展をしていけばいいなというふうに願っています。それで静岡市の国際的認知度も上げていきたいというふうに思っています。これが私の思いなんですけれども、ここに至るまで私や観光交流文化局に対して、様々なアドバイスや指南を提供してくれた、いわばまちは劇場の推進についての私たちのブレン。私が何回説明するよりも、本人に来てもらって直接記者の皆さんに話してもらった方が説得力があるだろうということで、今日、この記者会見のためだけに東京からこのまちは劇場のブレンの太刀川英輔(たちかわ えいすけ)さんにいらっやっただきましたので、ここで紹介方々登場していただきたいと思います。

どうぞ、太刀川さん、よろしくお願ひいたします。

【太刀川さん】

どうも、今、田辺市長にご紹介にあずかった太刀川です。皆さん、初めましてかと思うんですけども、どうぞよろしくお願ひします。

僕、ブレンというふうにご呼んでいただいたんですけども、何ていうんですかね、大変、僭越だなどと思う立場でもあるんですけども、文化庁で、皆さんご存知かかもしれませんが、拠点整備

事業というのがありました。実は静岡市はですね、一等通過しているんですね。要するに、文化庁が認める、これから日本の文化・芸術を発信する拠点としてですね、この場所、すごく重要だから、こういうふうモデルの事業として前にどんどん進めていきたいんだということがあってですね、そのブランディングディレクターという立場で関わらせていただいております。そういった中でですね、まちは劇場という政策について、田辺市長からも皆さんからも聞きました。伺ったところ、非常にもうそもそも大道芸であるとか、世界演劇祭であるとか、いろいろこう盛んにやられているんですけど、まちは劇場っていうのは、演劇の話とかパフォーミングアーツの話だけではないんだと。この5大構想のうちで創造都市政策全般の話「まちは劇場」って呼んでいるんだと。

なぜならば、それはみんなにとっての活躍の場を整備するってことだからだと。「なるほど、そういうことだったのか」とした場合に、これから国際発信をますますやっていきたいんだ、というふうに何度もね、僕もメッセージを受け取っているし、なにせ文化庁の拠点整備事業もですね、「世界に静岡発信しなきゃならん」という一大使命を担っておりますから、そういったところでですね、どういうふうにこのブランディングを進めていくかっていう中で今のロゴも強さもあるし悪くはないんだけど、「英語じゃないよね」という問題がありましてですね。わからないということをどうするか、「とりあえず英訳必要だよ」というようなところの理論から、このプロジェクトというかですね、ロゴを変えることもいいのかもしれない、ということがおこってきました。そういった中で、普通に訳すと「まちは劇場」って The city is a theater そう感じるじゃないですか。theater って感じじゃないですか。だけどそれだと伝わらないかもしれない。本領発揮して欲しいんだ“人に”っていう感じが、なんかちょっと懐かしいんですけど、ON STAGE っていう言葉を選びました。「ON STAGE SHIZUOKA」「あなたにとってのステージをいっぱい作ります」という。僕、普段の仕事はデザイナーでして、今回そのブランディングディレクターとしていろいろデザインをしているんですけども、僭越ながら僕がそのデザインも引き受けさせていただくことになって、こういうデザインにしてみました。

これだけ見ても、前のと何が違うのか、ということがパッと見ではわかりづらいと思うので、なんでこうしたのかということ、ちょっとご説明してもいいですか。お時間大丈夫ですか？大丈夫ですかね？長かったら言ってください。普通のロゴとしては非常に珍しくてですね。真ん中に置かれませんが、このロゴは、必ず角に置かれます。必ず角に置かれるロゴです。なぜなら角をめくった形だからです。これは、どういうことかというんですね、まちは劇場政策を進めていく主体というのは、静岡市というよりは市民の皆さんが、ですね。そうすると市民の皆さんが勝手にポスターを作ったりですね、色んなところで使うんですよ。自分たちが作ったポスターの右下に必ず入っていると、左上に必ず入っていると、そういう角に入るということがコンセプトなんです。いわば街角に入るロゴをデザインするというのが1つの目標でした。めくれた形になっています。めくると、皆さん外、ご覧いただくとわかるんですけど、めくれた形がそこに巨大にそびえ立っておりますね。日本最高峰がそこにとそびえ立っております。要するに、めくれた形が富士山であったり、あるいは駿府城のですね。「そり」「むくり」なんて言うんですけども、屋根の形なんか、こういう形をしていて、僕らの静岡市の僕らの記憶に「稜線」というんですかね、これはもう非常に結びついてるんじゃないかなって言うことで、めくれたら“富士山”っていう、めちゃ分かりやすいところで、これ外国の人に、これ

“富士山”みたいな。分かりやすい、みたいな。そこで、めくれたところでオンステージっていうふうに出てくると、それはステージそのもの。僕の裏コンセプトとしては、“この街を一度むく”っていうことがあるんですけど、そういう意味合いでも一度むけるっていう形をそのままシンボルにしています。右上に入るバージョンも右下に入るバージョン、いろんなバージョンがあるんですけど、そういったことです。今までのロゴよりも要するに普通にいろんな人が使いやすく、自分たちの自分たちが表現したいものをあまり邪魔しないロゴにしたいなということを思っていたものですから、こういう形になっています。今、お手持ちの資料があると思うんですけども、例えば、どこか商店街の空きシャッターみたいなね、空き店舗とかのところに、それ入れて、その前を舞台にするとか、そういうふうに、街角には入ることができるわけです。そういうことで行くんですけど、この街を舞台化していく。いろんなところに活躍の舞台を作っていくというところで、役に立つんじゃないのかとか、あるいは、あらゆる資料が、皆さんの手元もそうですけど、四角型なので、そうするとあらゆる資料に入っていけるから、例えば、産業振興系の起業家支援とか、そういった文脈の資料の右下にも入ることができるとか、そういうふうに、ちょっと主張しないで右下の方にちょこっといるロゴっていうのをデザインしたつもりです。デザインについては、だいたい以上というところなんですけど、今後ですね、まだ、この政策もこの5大構想として非常に広がっていきますし、それだけじゃなくて、この文化庁の拠点整備事業がなんと5年あるんで、そうすると、これからどんどん頑張っていかなきゃいけないところなので、このロゴないし、これから「まちは劇場」に習ったその先にある政策が街じゅうに広がってですね、まさに活躍の舞台が広がっていく一助になればなあと思っております。

【司会】

ありがとうございます。太刀川様には、また後ほど囲み(取材)を受けていただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。市長よろしくお願ひいたします。

【市長】

ということでまとめますと、この新しいシンボルマークの深い意味がご理解いただけたのではないかと思います。これから使って、ポスターやパンフレット、中心市街地へのバナーの展開などによる広告の展開、最大限にこれを使っていきたいと思っております。

私ね、とっても嬉しかったのは、私ずっとね、役所の縦割り行政の打破だと。局間連携だと言っていたでしょ。さっき予算案の①の資料見てもらいましたけどね、気が付いた方もいらっしゃると思うけども、5大構想のところ、「まちは劇場の推進」ここにさっそくこの新しいシンボルマーク使ってくれてるんですよ。これ財政局の職員が、僕が指示したわけなんです、観光交流局長は頼んだわけではない。財政局の職員が「これさっそく使おう」って、いつの間にやら、ここに使ってくれた。こういう使い方をするわけですね。財政局長と観光交流文化局長、隣同士だけれども、お互いに局長同士が話したわけじゃないんだよね、財政局の職員がこれを使ってくれた。ずいぶん局間連携ができてきたというふうには私はすごく嬉しく思いました。該当の職員を褒めておいてください、財政局長。いずれにせよ、今後はこの「ON STAGE SHIZUOKA」という新しいシンボル、静岡市民や静

岡県内の方々に来てもらうのではなくて、世界中からこの「まちは劇場」というアピールをする中で、静岡市を楽しんでもらうという「まちは劇場」の世界化を図っていくということを、ぜひご理解をいただきたいというふうに思います。以上です。

【司会】

それでは、ただいまの発表項目につきまして、ご質問がある方はお願いしたいと思いますが、ご質問の際は社名と名前をおっしゃってからお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

よろしいですか？ありがとうございます。

それでは、さっそく、幹事社質問に移りたいと思いますので、幹事社さんお願いいたします。

【市長】

この件は、太刀川さんが全部取材引き受けるから、後でよろしくお願ひいたしますね。せっかく来てもらったんですから。幹事社質問に入ってください。

【幹事社(NHK)】

今回 31 年度の予算案を出していただいたんですけども、紙を見ればわかるということで、「世界に輝く静岡市」ということで、十分理解させてもらって、いつも取材させてもらっているんですけど、その上ですね、次のステージというか、いろいろ進むために今回、結構ハード面の整備とかも充実してるかなと思うんですけども、そうしたことを踏まえた上でこの予算に名前をつけるとしたら例えばどういうふうな名前になると思いますか。

【市長】

はい、定番の質問ありがとうございました。

発表します、「未来への懸け橋予算」と名付けたいと思います。これはね、いろんな意味があるんですね。2030年というSDGsのビジョンとタッグをした私たちの総合計画ですから、その未来の目指すべき静岡市への懸け橋となるような予算という意味もありますし、また静岡市の総合計画自体もね、8年間の2015年から2022年までのプログラムなんですけど、前期4年、後期4年と分けて、まさにここが前期から後期への懸け橋になるわけでありましてね、移行になるわけですね。そういう意味でも前半4年間から後半4年間の未来への懸け橋予算ということになります。

また、いつも言っているんですけど、こういう予算を作るということは、今回公共投資額も確保しているわけですね。その公共投資が呼び水になって民間の投資を促す、そして経済の好循環を作って、そして、市民の懐が潤おう、市民に経済の活性化を実感してもらおう、そういうふうに繋げていきたい。そういう意味ではあくまでもその主役は市民の皆さんで、市民の皆さんがさまざまな取り組み、経済活動、消費活動をしてもらおう。そのファンダメンタルというか、インフラ整備、つまり橋になるのが私たちの行政の予算でその上で市民がドライバーになった車が通ってもらわなきゃ、この車がたくさんの方が、ちょっと賑やかになってきたな、静岡もなんか活性化してきたなあって、通っても

らわなきやいけないですね。そういった意味での懸け橋という意味もあります。
いずれにしても私も市民の一人ですから、市民の皆さんとともに、この懸け橋予算を通っていき
いなというふうに思っています。以上です。

【静岡朝日テレビ】

基本的には、やっぱりベースづくりをこの4年間しっかりしていきたいと。
市債残高としてもですね、過去最大になっているんですけど、そういったことをやはりベースを作る
ことによって、今後、解消していくということによろしいでしょうか。

【市長】

もちろんそうです。過去8年間、私、財政の健全化に取り組んできましたが、これも施政方針演説の
時にも言及いたしますけどもね、通常債のベースではね、約 400 億円圧縮をしておりますし、行財
政効果も出ています。政令指定都市の比較の中でも財政の健全度を維持していると、胸を張れる
レベルまで入ってきました。

だから、ここからからは投資をするというね、「世界に輝く『静岡』」の実現に向けた予算と、あと一方
でね、財政規律というのは大事ですからね、財政規律というものはきちっと守ったね、効率的な行
政運営というものの両立した、そんな予算案を財政局中心に作っていただいたなというふうに理解
をしています。

【司会】

よろしいですか。ありがとうございました。
それでは、その他、各社さんから・・・さっそく、朝日新聞さん、どうぞ。

【朝日新聞】

今の予算に絡みまして、予算書のですね、資料③の 127 ページに出てくる畑総合事業・・・

【市長】

畑総(はたそう)ね、畑総。どこ②？

【朝日新聞】

これは、あのJAの清水がですね、訴えていたその畑(はたけ)の整備促進という政策協定もありまし
たけれども、これを受けての予算でしょうか。

【市長】

おっしゃるとおりです。JA清水と政策協定をしましたのでね、それをさっそくこのような形で予算に
反映をいたしました。

先ほど申しあげました農林水産統括監、まだ仮称でありますけれど、これを局長級一人の配置をして、そして組織の体制、マンパワーの充実も図っていくというのもその方向性になかった取組だと理解をしてください。

【朝日新聞】

JAのプレッシャーが効いたってことでしょうか。

【市長】

これは協定ですから。協定ですから、紳士協定ですから。

【司会】

他にいかがでしょうか。中日新聞さんどうぞ。

【中日新聞】

質問2点なんですけれども、1点目が今回、積極的予算とお話をされたと思うんですけど、改選期を前にいろんな自治体では骨格予算にして、当選後に補正をつけていくという形を取るというのは結構多いんですけど、今回、過去最大を更新した要因というのは、国の施策の影響もあるのかなと思うんですけど、過去最大になった理由っていうのをどう見ているのかということと、もう一点が、先ほど財政健全化を進めてきたとありましたけど、今回も当初ベースでは財源不足が50億円あって、今後もそれなりにあるという中でもう少し具体的に財政の健全化っていうのをどう進めていきたいのかっていうのをちょっと教えてください。

【市長】

とてもいい質問をいただいたなというふうに思っています。私はね、骨格を組んでから後から補正という手法は採らないですね。

実は、この予算案を所管局中心に行政の中で査定を繰り返して作ってきているわけですけども、一方で私は次期4年間に向けて何をするのかということについてのマニフェスト作りに、今、民間の皆さんの声もふまえて取り組んでいます。そのマニフェスト、私がこれから選挙に市民の皆さんとの約束としてお示しをするマニフェストとこの31年度の当初予算っていうのはセットになっているということなんです。ですから、マニフェストっていうのはね、市民の皆さんから見て魅力的に映る、そういう見せ方をしていくという工夫は必要なんですけど、でも根っここのところでは一緒なんです。

そこのところがちゃんと両立してないと、辻褄が合っていないと、これはいけないわけがありますよね。

それがね、実はマニフェストっていうのがこの頃、選挙の標準装備になっているんですけども、特に首長選挙ではマニフェストを掲げて選挙をします。そして政策で選んでもらうと。誰々さんから頼まれたから入れるよということではなくて、政策選挙にしていかなければいけないんですけども。ただ難しいのは、そのマニフェストというのが思いつきでポンとこれ集票に役に立つだろうってや

ると非常に行政が混乱をしているんですね。昔、民主党が子ども手当で月2万6千円なんてマニフェストを掲げて大混乱に陥りましたね。なかなかマニフェストと行政運営の両立ということが、今、日本のこのなんて言うのかな、民主主義、マニフェストを伴う民主主義ということが問われている。どのレベル、特に首長と国政選挙ですけどもね。でも、そこら辺のところ、試行錯誤の今まだ段階です。

それで、私は、もともとマニフェストの研究所の特別研究員を務めさせていただいて、私の恩師がね、元三重県知事の北川正恭先生でありますので、すごくそのところを意識して、やはりちゃんと事前に現職の主張であるから、これから現職の候補者として掲げるといふか、お示しするマニフェストと、この初年度、私が責任として作る予算って一致させておかなきゃいけない、そんな思いがこれに反映されているという理解をお願いしたいと思います。以上です。

もう一つなんだっけ？

【中日新聞】

50 億円とか、今回の当初で出ているんですけど、今後も・・・予算書を見た方がいいですかね。

【市長】

これもね、先ほど総論を申し上げましたけれどもね、公共投資と財政規律のギリギリの均衡点を求めて議論をした末の予算だという理解をお願いします。もっと、テクニカルな細かいことは財政局長の方にまた聞いてください。

はい、次。

【司会】

いかがでしょうか。

静岡朝日テレビさん、どうぞ。

【静岡朝日テレビ】

予算のことではないんですが、水道の件でお尋ねします。静岡市の水道収入が減る中ですね、2020 年には水道料金が 15%上がるということで、その後もかなりの水道料金の値上げが予想されるということですね、結構市民から不安の声が上がっているんですが、この件について市長の見解をお願いします。

【市長】

まず、理念を掲げなきゃいけないんですけども、持続可能な水道事業を、この先静岡市もしていかなければいけないということでもあります。さあ、どうするかということです。これも今全国的な課題になっているわけですけども、私は公営企業体を維持しつつ経営の持続性ということも求めていきたい、この両立を図ってきたいということでもあります。

この度、朝日新聞さんかな？とても力の入った記事がありました。非常によく取材をされているなあというふうに思いました。その通りなんです。それをモチーフにしての質問だと思いますけれども、そこのところは公営企業体としてアセットマネジメントもしていかなきゃならない。

しかしながら、水というものはね、やはり直営で私たち行政が公共企業として、やはり安心安全な水を提供していかなきゃいけないと。そのためにやはりコストとしてかかるんだと。場合によっては、値上げもお願いしなければいけないと。こういうことは、きちっと丁寧に説明をしていき、市民との対話の中でね、これからの水道経営をしていきたいなというふうに思っています。

【静岡朝日テレビ】

ありがとうございます。

【司会】

読売新聞さん、どうぞ。

【読売新聞】

静岡市のペットボトル回収量の問題でお伺いしますが、この度民間での独自回収分を含めても昨年度の回収量が他の政令市の7割以下にとどまるというデータが出ましたが、それについて市長の受け止めと要因をどのように考えているかお伺いします。

【市長】

この前も話題になった件ですけれども、とにかくSDGsとタイアップをした私たちは地球温暖化を防止していかなければいけない。その中でペットボトル問題はどうかということについて、まだまだ認識が甘かったなというふうに理解をしております。そして、本当に記者のご指摘による新聞記事を見て「なるほど、その通りだな」と実態とは異なっているなということも今回承知をしましたのでね、それに向けて、環境局と議論を来年度に向けて進めていきたいなというふうに思っています。

【読売新聞】

関連で、その議論をしていくということなんですが、その中に現在の市の回収方法の見直しというのが含まれるのか、今後検討する考えがあるのか、お伺いします。

【市長】

そうですね、それも含めて幅広く議論していきたいと思っています。

【司会】

朝日新聞さん、どうぞ。

【朝日新聞】

4月の市長選挙についてですが、今のところ田辺さんだけですね、今、どんな心境なんですか。

【市長】

それは、私は脇を締めて4月7日まで選挙戦を戦う決意しております。また、これもこの前も申し上げましたが、4年に1回、有権者の皆さんにとっては、今回18歳以上の市民にも選挙権が提供される初めての統一地方選ですのでね。やはり候補者にとっても直接私自身が生の声で有権者の皆さん、市民の皆さんに今、記者の皆さんにお話をしているようなこんな予算案を作ったんだと、これはこういう都市ビジョンに向けての懸け橋の予算なんだと。それは世界に輝く静岡市なんだと言って、こういう構想があるんだと。やっぱり、こういう説明もやっぱりちゃんと市民の皆さんに2週間っていうね、政令指定都市ですから選挙期間が与えられているわけですから、これは十分に私ね、活用をさせていただきたいなというふうに思っています。

【司会】

読売新聞さん、どうぞ。

【読売新聞】

関連で、今18歳以上の初めての統一地方選というお話をされました。予算案と今後示されるマニフェストがあるということなんですけれども、その若者世代に向けて特に訴えたい政策というのは市長としてありますでしょうか。

【市長】

それは、静岡市に住み続けてほしいと。そして皆さんに住み続けられるまちづくりを提供していくというメッセージを伝えていきたいと思っています。

あのSDGsの目標11にね、「住み続けられるまちづくり」ってことがあるわけですね。だけど若者がいろんな目標を持って人生を歩んでいく中で、やっぱり都市を選べるわけですね。仕事の都合上、どうしても東京に行かなきゃいけない。私たちの頃は、記者の時代はかなりもう意識が変わっているのかもしれないけど、私の時は昭和50年代前半ぐらいでしたけどね、とにかく東京に行かなきゃ人生始まらないと思っていましたから、高校生の私は、早く東京に行きたいと、早く東京に行って国際的に活躍をしたいとかね、そういう意識でしたよ。

だけど、ずいぶん日本全体の時代が成長拡大の局面から成熟・持続可能な局面に変わって、今じゃね、あの時の静岡に戻ってきた私は、イギリスに留学して向こうのクオリティ・オブ・ライフというのかな、ワークライフ・バランスというのが、そういった生活ぶりを見てきて考えが、だんだん、だんだん変わってきたんですけれども。東京のどこかの組織に属するということが、受験勉強の動機だったんですけれども、高校時代のね。でも、その後10年経って海外から戻ってくるときに、いやそんな気持ちは全然なくなっていましたね。私はそうじゃないと、静岡に戻って来よう。静岡の方がワークラ

イフ・バランス、自分らしい人生が歩めると。あの 30 代の時にマイホームかマンションか買って、毎日ね、1時間、2時間かけて、ぎゅうぎゅう詰め満員の電車に揺られて通勤するのは嫌だなと思った。そうせざるを得ない日本のね、東京の一極集中の実体経済というものがあるんですけども、そのところをね、地方創生の中で若者の皆さんに「いやそうじゃないよ、静岡市でも自己実現ができるよ」というような社会環境を提供していく、住み続けられる環境を提供していく、これがメッセージです。もっともっと具体的にね、選挙の時には申し上げますけれども、そういうことだと理解して欲しいと思います。

日本経済新聞社の去年かな、あの若い女性の記者さんもいたじゃないですか。一流の日本経済新聞に入ったけども、すっぱり辞めちゃって、静岡に私は住むんだと。何か気づきがあったんでしょうね、彼女の中に。すごく、私とすると、私の求める都市ビジョンってね、よく決断してくれたと。支局長は泣いたらしいですけどね。

【司会】

よろしいですか。はい。

市長から一つ何か……。

【市長】

申し訳ございません。先ほど私、オリパラが 2022 年に開催するって言ったって、広報課長に厳しく言われまして、訂正をしてくださいと。オリパラは 2020 年です。

言った？

【司会(広報課長)】

聞こえました。

【市長】

一応、ライブ配信中だし、まずいから。

2020 年です、東京オリンピック。当たり前でございます。

【司会】

それでは、以上で本日の定例記者会見を終了させていただきます。

次回、3月7日、木曜日の午前 11 時からとなりますので、よろしくお願いいたします。

本日はありがとうございました。